

昭和三十年当時、白石川では夏場になると、堰堤の上流に設けられた水泳場は、川遊びを楽しむ子どもたちでにぎわったものです。ただ、昔の河川には淀みがあったので、その深みに入ってしまったら、と監視員たちが見守ってくれていた姿が思い出されます。夏は川で過ごすのが楽しかったですね。

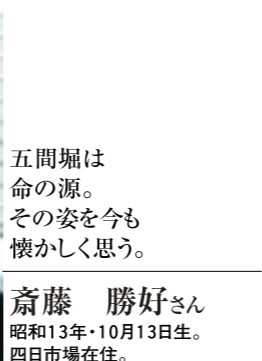
斎藤(勝) ◆今でこそ排水専門の河川となった五間堀ですが、私が幼い頃は生活用水としての役割を果たしていた記憶があります。稲荷山用水から取り寄せた水を、いまは撤去されてしまった八枚水門を締め切ることによって農業用水として使用していたようです。それに、八枚水門が締め切られると、水が満々と張るので、子どもにとっては恰好の泳ぎ場になるんです。プールなんてない時代でしたから、嬉しくて、それをめがけてよく飛び込んだものでした。河川改修で、私が幼い当

人々の命と生活を 守った河川改修。

町長 ◆皆さんの懐かしい思い出話のなかに川の淀み、深みの話が出ましたが、私自身は怖

時過ごした面影もなくなってしまうかもしれませんが、あの時の光景は今も鮮明に思い出されますね。日下 ◆白石川でも鮎の稚魚を放流し、七月の解禁日を迎えると、鮎釣りは町内外からたくさんの方が訪れ、盛んに行われていますね。

安藤 ◆私たちの地域では、確か、小さい頃は古川で泳いでいて、ある程度泳げるようになると、ガキ大将と言われる子が白石川に連れて行ってくれるんです。そこで、川幅が狭いところを泳ぎるんですが、行く時は仲間と一緒に泳いでくれる。しかし帰りは、泳げなかったら橋を渡って帰って来い、なんていわれて必死になって泳いで帰るんです。そんなことをしながら泳ぎが上手になつていったものでした。



五間堀は命の源。今もその姿を懐かしく思う。

斎藤 勝好さん
昭和13年・10月13日生。
四日市場在住。

河川のあるがままの姿とかかわつてきたのが私たちの時代だったのだと思います。それに、私たち柴田町民が川と深くつながってきたことは、町の地区形成から感じています。私の家は、大正時代まで阿武隈川沿いで茶屋を営んできましたが、堤防ができ、人々の生活道が刻々と変化を遂げていくなかで、地区の位置づけも随分と変わってきたように思いますね。

日下 ◆享保年間に起きた洪水は、まさに寝耳に水の災害でした。地元では降つていなかったのに、上流の豪雨が四日市場の堤防を決壊し、人々の寝込みを襲つたといえます。川との共存には必ず生命の安全という課題があるんですね。

現代における、 川と人とのかわり方。

町長 ◆住民にとって水害がなく安心して河川との関係が形成されていくことは非常に重要なことです。ただ、蛇行した河川をテトラポットで護岸することで河川が穏やかになる反面、水流が滞り、水質が汚染されていくという状況も免れないものでした。そんな姿を心苦しく思ったこともありま



白石川にて。それぞれの胸には川の原風景が鮮やかに記憶されている

くて行く勇気がなかったように思います。私は平成元年か

ら三年間、河川管理という職務に従事してりましたが、その頃の川の管理方法をいま振り返ってみますと、安全性を第一に、そして農業用水の利水を重視して行われていたと感じています。それが前面に出すぎて、人と川のつながり、つまり地域の方々の思い出が減ってしまったような気もしています。

斎藤(勝) ◆町長のおっしゃるとおり、河川の景観が変化してきたのは、現代の河川改修工事が要因のひとつになっていると思います。しかし、人々の命と生活を水害から守ることは代えられないというのが、農業に携わる人々の一番の思いではないでしょうか。河川の氾濫で、農家の命ともいえる農作物が幾度となく甚大な被害を受けている農家にとっては、水害から農作物を守ることが何よりの願いでしたから。五間堀は低地排水路として機能することで、農業と最も深いつな

したが、現在は徐々に規制が弱まり、川とのかかわり方への意識改革の時代がおとずれていきます。どうすれば川と密接にかかわっていくことができるのか、町民の皆さんとともに考え、力を合わせて実現していきたいと考えています。

斎藤(勝) ◆時代の流れとともに、川の姿は変化しましたが、昔も今も、良い面と悪い面の両方を兼ね備えていることは変わらないのではないかと思います。生活の一部でもあった密接な川とのかかわりが少なくなった一面もありますが、その一方、改修工事が行われたことで、土手が整備され、ウォーキングやサイクリングなどを個人で楽しんでいる方の姿を多く目にするようになりました。以前の河川では決して目にすることのなかった光景です。これは河川との新たなかわり方と言えるのではないのでしょうか。

町長 ◆川が生活の一部であった昔は、何か働きかけなくても川との関係が築かれ、自然と人が調和していた時代だったと思います。そういった時代を思い返すとき、私たちの生活がスムーズに流れていないことに違和感を感じ始めるのだと

思います。

現在の行政における河川づくりは、親水と公園づくりが主体となつていきます。しかし、河川とのかかわりが少なくないついでに現代では、ゴミの不法投棄などの環境問題に代表されるように、川を重んじる心が失われてきています。そういった河川管理の難しさが、ある時代のなかで、行政が声を大にして河川の環境整備を呼びかけたとしても、気持ちのないうちには何も響かないというのが現状なのかもしれません。

斎藤(幸) ◆その昔、川は人々が生活していくための命の源であり、必要不可欠な存在であったために、川の存在を重んじる気持ちは誰しもが持ち合わせていました。今は、川と密接にかかわらなくとも不自由なく暮らしていくことができ、世の中になつてしまった。それは、環境問題を生じさせる原因のひとつであると言えるでしょう。やはり、新たな川との関係づくりを考えると、川は柴田町の貴重な財産であるということ、町民一人ひとりがもっと深く認識する必要がありますのではないのでしょうか。

柴田人、 川との暮らしを語る



川が生活の一部ではなくなった現代だからこそ、
子どもたちに川の大切さを体感してもらう機会を。(斎藤勝好)